

第3章 創造的 Q&A のすすめ

2. 指導の実際

(2)自己投影型 Q&A ー傍観者から当事者へー

学習者を出来事の当事者として位置付ける質問。(P41)

→教材をより身近に感じさせる。

生徒の創造性をくすぐる質問。(必ずしも伝記的事実と一致しなくてもよい)(P42)

(3)主体的 Q&A ー回答者から質問者へー

生徒たちに自ら積極的に発問させる。(P43)

⇒英語での質問に慣れさせ、受け身的な言語行動の特性を改善させる。

教師の回答にも工夫が必要。(P44) ALT が参加できると尚良い。

⇒comprehensible input(理解可能なインプット)に触れることができる。

(4)生徒間での主体的 Q&A

生徒同士が質問役と回答役になる。

- ・質問役が質問を続けるため、また、回答役が的確かつ創造性を働かせながら回答するには、(3)主体的 Q&A の段階で他の生徒や教師のやりとりに注意しておく必要がある。
- ・スムーズに進めるには、display question から始め、referential questions, personal questions へ移行していくと良い。
- ・ペアの相手を変える

3. まとめ

【創造的 Q&A のメリット】

① Q&A の真実性(authenticity)の向上

発問者が回答者の理解度を測るための質問ではなく、知らない情報を得るための質問。

display question と異なり、発問者と回答者の間に存在する doubt の要素が Q&A の真実性を上げる。

② 教材と学習者との心理的距離感の短縮

当事者になりきって回答することで、教材の内容を身近に感じるようになる。

③ 英語での質問スキルの向上

生徒は否応なしにリアルタイムで英語の疑問文を自作しなければならず、基本構文の応用力が必要。

④ 生徒からのアウトプットの誘発

発問したり回答したりすることで、学習者は多様かつ多量のアウトプットを発することができる。

[感想]

自分の経験からしても、英語の教室内では質問もその回答も決まりきったやりとりしかしてこなかったように感じ、本章のようなより実践的なやりとりは、自分が、何が苦手なのかを自身で把握することもでき、かなり身になるのではないかと感じる。ただし、その質問の構成は学習者にとって適切なレベルでなければならないことに注意したい。

以上